

第 6 回 今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者会議について

2023 年 7 月 12 日に今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者会議が開催された。

14:00 から 16:00 までの予定であったが機材トラブルの影響で開始が遅れ、14:30 から 16:30 まで行われた。

対面での傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。100 人ほどが視聴していた。

今回の議題は以下の通りである。

1. 今後の教育課程の在り方について

対面と WEB 会議を組み合わせた方式で行われ、文科省の会議室からは天笠座長、市川委員、貞広委員が、ネット経由では石井委員、秋田委員、戸ヶ崎委員、遅れて高橋委員が参加した。荒瀬委員、奈須委員、富士原委員は欠席のようだった。

まず、事務局から資料 2 について説明があった。

これまでの議論から出てきた課題から、本日のテーマとなる以下の論点を提示した。

学習者である子供たちの全人的な発達を支え、資質・能力の育成を保障する観点から、学校における教育課程をどのように構想するか。

- ① 幼児教育から高等学校卒業段階までの発達（認知的発達、身体的発達、社会情緒的発達、キャリア発達）をどのように支えるか。
- ② 教育課程全体の学び、各教科等の学びを通して、子供たちにどのような資質・能力の育成を目指すか。
- ③ 子供たちが学ぶ内容を、どのような原理・方法で選択・組織するか。
- ④ 子供たち一人一人の特性等を考慮した教育課程の個別性と、それらを包摂する学校の教育課程との調整をどのように図るか。

そして、これらに関連する指導要領の記載や解説の記載などを示した。

第 5 回では、天笠委員と荒瀬委員が提案を行い議論し、今回の第 6 回では、秋田委員と石井委員が論点の提案を行いそれについて議論する。

14:40 頃より、まず秋田委員が発表を行った。

「発達の視座から」と題して主に①、④のテーマを中心に論点を提示した。

発達の段階は「学びや発達の連続性」「生活の連続性」を共有することが重要であるが、環境移行による不連続性が発達の危機を生む。接続部分を補うのりしろが重要である。ま

た、複線的な発達や非定型な発達への言及が必要となる。

資質・能力の3つの柱については、相互に関連しあっていて、汎用的能力として学び方を学ぶ自己調整学習能力を育てていく。

キャリア発達については、職業だけでなくワークライフバランスやライフデザインといった生活者としての教育を義務教育段階から行うことが必要となる。

多様性への対応については「困難の解消」だけではなく「個性や才能を伸ばす」という視点も必要。インクルーシブ教育やユニバーサルデザインの視点から個別に対応していくために全体を柔軟にしていく必要がある。

15:10頃より、石井委員が発表を行った。

主に②、③、④のテーマを中心に論点を提示した。

②については、コンピテンシーベースの改革の原点の再確認が必要である。

③については、教科内容の選択と構造化の原理を考えることが重要となってくる。

④については、多様性に対する間口の広いインクルーシブなカリキュラムをどう実装するかが論点となる。

15:45頃より、議論と質疑応答を行った。

戸ヶ崎委員：発達心理学や認知心理学の知見を活かすことは大切な視点であると考えている。しかし、最新の知見をすぐに教室に持ち込むことは慎重になるべき。現場にわかりやすい言葉で伝え、全体を捉える工夫が大事。また、資質・能力をどう育て、評価するのか現場でいかに実践につなげるかが課題である。最後に、資質・能力を階層的に考えるには、あまり多くせずシンプルでないと実践しづらい。汎用的能力である自己調整学習も興味深い、それをどう育てるかが課題となるだろう。

市川委員：主体的に学習に取り組む態度は情意的だから評価に適さないというのが石井委員の意見であったが、これまでの議論では認知的要素もあるとして観点別評価に入れている。情意的なものと言ってよいのか、改めて意見を聞きたい。

貞広委員：カリキュラムの構造化は魅力的な考え方だが、実際に組み込むには誰がどのように行うとよいのかその道筋の見通しを知りたい。

天笠委員：秋田委員には、学年や学校種を発達として捉えるときの意図やねらいをもう少し詳しく聞きたい。また、架け橋プランについての今日的な捉え方、課題を説明してほしい。石井委員には、システムの枠組みのスライドについて、教室の多様化に対する改革の方向性であったが紹介の意図を教えてください。

高橋委員：教育課程は複雑になっていこうとを感じる。どのように実現したらよいのかと考えた。多様なニーズに応じるのは難しい。

秋田委員：戸ヶ崎委員の意見について、実践ベースで指導していくのも日本のよいところ。現場への概念の翻訳、わかりやすさが重要だと感じた。天笠委員の指摘について、学年

という制度は、個別に対応できないこともあるが、多様な学びが発達を支える側面もある。架け橋プログラムについては、幼児教育が無償になったことによって全ての児童を小学校に繋げることが求められてきた。幼児教育だけが問題とされ、小学校側の低学年の一斉指導を変えられなかったことが架け橋プログラムの大きな意義となる。高橋委員の意見について、ICT で子ども自身が学びの履歴を追うことには大きな意味があると考ええる。

石井委員：言葉や概念の翻訳が大切。難しい点は、学習指導要領が誰のためのものかはっきりしていないこと。全体のシステム設計は緻密にするが、それを見せるときにはシンプルにすることが必要。カリキュラム実現方法として「誰がどのような手順で」ということは重要な議論である。市川委員の意見について、主体的に学習に取り組む態度はずっと情意的だと考えている。メタ認知や自己調整学習など概念の検討はするべき。戸ヶ崎委員の意見について、煩雑にせずシンプルにという点は同意する。天笠委員の意見について、システムの枠組みは学校の定型を緩めて再構築する観点を示している。リソースを投入してクラスサイズを小さくしたりすると様子は変わる。見守られている感覚が持てるように条件整備することが必要。

戸ヶ崎委員：「概念の翻訳」、「設計は緻密に、見せ方はシンプルに」という考え方はあらためて大事だと考える。

市川委員：専門用語の出し方は注意が必要だと考える。敬遠されたり、誤解が生じたりするので、わかりやすい表現でありつつ新しいポイントを示すことが大事。自己調整学習のことを「学習改善の工夫」と表現している。純粋な情意ではなく、認知的側面があると考えている。

貞広委員：石井委員の「学びの転換にはリソースの追加投入が必要」という点に同意する。「概念の翻訳」については、必要だが慎重に行わなければならない。すべて翻訳するのではなく、理解してもらう努力もするという二刀流が必要なのではないか。

今回は、市川委員、貞広委員、戸ヶ崎委員が論点提案を行ったのち、議論を行う予定である。